

ポストコロナへの心配

園長 児嶋 草次郎

時は刻々と過ぎ去っていきますが、新型コロナは影のようにいつまでも人間にまとわりついて来ていて、1年が経ちました。もはや世界の隅々まで感染が広がり、多くの人が命を失っています。そういう時の経過の中でアメリカ大統領選挙が行われ、ジョー・バイデン氏が勝利。その就任演説の中で次のように述べておられる部分には少々ショックを受けました。

「100年に1度のウイルスが静かに国にはびこり、第2次世界大戦で失ったのと同じだけの米国人の命を、1年間で奪ったのです。」(朝日新聞1月22日付)

第二次世界大戦時の死者と比較して物事を考えておられるモノサシが、私たち日本人とは違う、それが驚きなのです(アメリカのコロナ死者39万7000人)。一方負けたトランプ氏の方は、敗北を認めようとせず、自身のツイートで不正選挙だと決めつけ、「戦争行為と見なし、死にもものぐるいで闘うつもりだ」等と、その支援者を扇動し、デモ隊の一部がワシントン連邦議会議事堂を襲撃し一時占拠したというニュース(死者も5名出た)も、違和感をもって受け止めました。クーデターに発展して、中国やロシアのような独裁政治を、彼は夢想したのでしょうか。偽情報をたれ流し続けたり、民主主義国家アメリカも質が落ちたものだと感じました。

「世界経済破綻防ぐには」という見出しのインタビュー記事の中で、世界銀行チーフエコノミストのカーメン・ラインハート氏は、「多くの都市がロックダウン(都市封鎖)となり、経済活動が激しく破壊されたという意味では『戦争』に近い」と述べられておられます(朝日新聞2月5日付)。

毎日、この茶臼原の大自然の中で、梅の花や日本スイセンの花の香りに癒されながら、三食キッチンと食事も取れて、子供たちと静かに生活できている立場の人間からすると、「戦争」というような言葉がこのコロナ禍の中で出てくると、おぞましい気持ちが湧いて来て、この平和な光のすぐ向こう側に、何かヒタヒタと迫って来ているのではないかと不安になります。

1年ちょっと前までは、大都会には外国人観光客があふれ、東京オリンピックに向けて次々にホテル等が建設され、グローバル化された街中で若者たちは都市文明を謳歌していたのです。この激変ぶりは何なのでしょう。そして、これからコロナ後、日本社会はどうなっていくのでしょうか。ポストコロナについて、多くの学者たちが論じ始めていますが、私が一番気になるのは、グローバル化とそれに添った行政指導とその権限の強化です。今回のコロナの世界的感染拡大が、グローバル社会と大都市優先社会への神(天)からの警告だとするならば、何らかの反省がないと、それこそ「戦争」をイメージさせるような地球規模の崩壊が始まるのかもしれないと思ったりします。

そう言えば、作家で数学者の藤原正彦氏は「亡国の改革至上主義」(文芸春秋12月号)の中で、アイルランドの思想家エドモンド・バーク氏の次のような言葉を引用されていました。

「制度、慣習、道徳、家族などには祖先の叡智が巨大な山のごとく堆積している。人間の知力では遠くそれに及ばない。理性への過信は危うい。」

私はグローバル化には人の交流のグローバル化と価値観のグローバル化と二つあると思う

のですが、今後、人の交流が進むのは時代の流れで仕方ないとしても、価値観が強い行政主導の中で、急激に世界標準化していくところについては、強く抵抗感を抱きます。藤原氏もそのことを言っておられるのだらうと思います。未来の子供たちのために先人たちが築きあげて来た生活文化を大事にしていきたいのです。

ここまで書いて話題を大きく変えます。日本の生活文化を守るという意味で勇気づけられる本が、寄贈で暮れの12月18日に送られて来たのです。私たちは社会的養護に関する福祉文化を守る使命を背負う人間ですが、英語圏の価値観に呑み込まれようとしている現状の中で、同志を得たような気分になりました。

北海道家庭学校より、新刊『『家庭』であり『学校』であること』を拝受したのです。さっそく拝読し、強い共感を抱きました。私は大学を卒業し1年間ほど、この北海道家庭学校（児童自立支援施設）で実習をさせていただきました。当時の校長は、谷昌恒先生で、実践としては、私の原点でもあります。今、友愛園でできるだけ花を作る文化は、ここより取り入れたものです。

今回私は、児童精神科医の富田拓氏の文章に注目しました。氏は、医大を卒業後、家庭学校に指導員（教護）としての勤務も経験されているようです。令和元年6月に家庭学校内に診療所が開設されて以降、網走刑務所の医師をしながら、この診療所で子供たちを診ておられるとのこと。

指導員、医師の両方の視点で子供たちに接しておられ、非常に説得力のある文章となっています。アメリカナイズされた現場を知らない医師や研究者たちの文章とは全然違います。

「夫婦小舎制という稀有な治療文化が日本に残されていることは誇るべきことだと思います。」

『『生活が陶冶する』』と述べたのはスイスの教育者、ペスタロッチでした。留岡もまたそれを実現しようとしていました。健康な生活こそが子供を変える、と考えたのでした。」

「〇〇セラピーをやったら良くなりました、といった単純なものではありません、子どもの生物学的な面、心理的な面、子どもの社会的な面のいずれにも同時に働きかけなければならないのです。」

「家庭学校での暮らしは集団療法であり、環境療法であり、個人心理療法であり、行動療法であり、これらを全て統合したものが生活療法だ、ということが出来ます。」

平成29年8月に厚労省より出された「新しい社会的養育ビジョン」の根底には、施設の集団的養護を否定する価値観があります。アメリカがほぼ集団療法が機能しない文化になってしまっており、そこで学んだ学者たちが、個人主義的ケースワーク、カウンセリングのみで養育を語るようになっているのです。その価値観を基盤としてあの「ビジョン」はまとめられています。

私たちには政治力はないので、現在署名活動をやっていますが、このように第三者的立場の方から伝統的な集団的養護を擁護していただくと、職員たちも力をいただけます。

私は、20冊新たに注文し、1月14日の職員会議でこの本を取り上げました。以下、若い職員の感想です。勇気をいただけています。感謝です。

「私自身、信念をもってこの仕事に励もうと再確認することが出来た。子供たちと共に生活し、子供たちにとってここでの生活が誇りとなるよう全力で向き合っていきたい。そして友愛園で築き上げてきた大切な文化を残しつつ、子供たちの運命を変える手助けができたと思う。」（早田）

「富田医師も『いつかその子が思春期を振り返り、家庭学校での暮らしは無駄ではなかった、

と思える日がくればと願う他ありません。』と述べているように、私も『あの時友愛園に来て良かった。西畑先生の担当でよかった』と思ってもらえるように、これからも子供と全力で向き合い、エネルギーを注いでいこうと思いました。」(西畑)

「とても興味深い内容で、今やっている事が間違っていないとも思え嬉しくもなった。家庭学校の生活は友愛園の生活とも似ている所があり、親近感が湧いた。自然の与える影響について『天然の感化力』という表現で記入してあり、友愛園の方針ととても重なると感じた。自然の環境は作ろうと思って作り出せるものではなく、今あるこの環境に感謝したいと感じた。」

(西山)

「今回、この本を読んで改めて友愛園の良さを再認識できた。友愛園と同じような取り組みを遠い北海道で実践されている施設があることに、勇気をもらった。」(杉田)

コロナに感染して行政の指導に従わない場合の罰則もこの度国会で決められました。当然のことかもしれませんが、「新しい生活様式」がコロナ後もマニュアル化して、日常生活を行政が細かく規制していくことにならなければよいかと危惧しています。

先ほどの「新しい社会的養育ビジョン」は、日本の社会的養育・養護をアメリカ・イギリス等の価値観に合わせようとする取り組みです。それが世界標準だとしているわけです。

本来、子育て・子育ちというのは、その民族にとって一番重要な課題で、それをおろそかにしていたら、たちまち他民族に攻め滅ぼされてしまうか、内部崩壊して消滅するかして来ました。日本民族を見ても、各地域で必死に次の世代を育てて来ています。江戸時代の各藩の藩校を見ても、薩摩の郷中教育を見ても、吉田松陰の松下村塾を見ても、広瀬淡窓の咸宜園を見ても、歴史を次の世代につないでいくための命をかけた子育て(教育)でした。

当然その地域の歴史・自然・文化にその子育て(教育)は影響を受けます。知識は標準化されても人の育ちは簡単に標準化されるものではありません。その地域地域で私たちの先人たちが命をかけて築きあげて来た子育て文化に謙虚に向き合い、次世代につないでいかねばならないと思います。例えば、高校野球の球児たちや大学の駅伝選手たちが同じ屋根の下で寝食を共にし、切磋琢磨し合うのは、日本独特の子育て(教育)文化と言えます。個人主義の欧米ではこのような集団養育(教育)はあり得ないでしょう。私たち社会的養護に携わる職員も、その延長線上にいたのであり、先人たちの築いた子育て文化に習い、地道に取り組んでいきたいと思っています。

「新しい社会的養育ビジョン」をもとに、各都道府県の推進計画はこの4月よりすでにスタートしております。今のところ施設現場に大きな混乱は生じていませんが、「標準」へ向けて行政指導がより厳しくなっているのは感じています。何を变え何を守っていくのか、判断を間違えないようにしたいと思います。

以下は第107回石井十次記念式(1月30日)での挨拶です。

コロナ禍の中、石井十次記念式に御出席くださいます、ありがとうございます。

コロナ感染症は収束どころか、現在第三波の渦中にありまして、世界中で流行し、感染者は1億人を越え、死者も200万人を越えているそうです。欧米や中国・ロシア等ではすでにワクチンの接種が始まっていますが、日本では高齢者は3月下旬、一般の人たちは5月頃から始まると言われていています。おそらく全世代終了するまでには、夏頃までかかるのではないかと思います。それまでは気が抜けず、三密防止やマスクの徹底等は続けていかねばならないのかと思います。

石井記念友愛社では、350人ほどの職員と900人ほどの利用者がいますが、この1年間、現

在までにコロナ感染症を出さずにすんでいます。職員それぞれの配慮と自己規制あつてのことだと感謝しております。宮崎市内等では特に老人施設等でクラスターが次々発生しており、油断のできない状況ですので、今後も気を引きしめて対応していきたいと思ひます。

さて、石井記念友愛社の事業について報告させていただきます。4月1日より、石井記念のゆり保育園が石井記念のゆり幼児園として再スタートすることができています。西都市側にあつたものを、木城町の特別の配慮により、木城町側に移動新築することができました。利用者のほとんどが木城町内の子供たちでしたので、あるべき姿に整備することができました。さらに、長年の課題であつた友愛園の幼児さんの通園もこの4月より実現することができています。現在4名の幼児さんがのゆり幼児園に通うことができております。社会性の養成においては、随分プラスになっております。幼児園とは、保育園と幼稚園を合体させたものであり、定員60名に対し、現在60名であり、まずまずのスタートとなっております。経営的にはまだまだ努力が必要ですが、新時代に向けてさらなる前進をしていかねばなりません。

新しい事業がもう一つスタートしております。延岡の自立援助ホーム「みなこホーム」が5月よりスタートしております。大学生専用の6名定員のグループホームです。現在友愛社からの大学通学生は10名ほどいますが、それらの大学生たちを卒業までいかに支援していくのかが大きな課題となつていました。このグループホームには3名の職員が常駐していますので、色んなトラブルにすぐに対応できます。九州保健福祉大学が4名、農業大学校生1名が生活しながら通学し、それ以外に、他施設からの措置変更で入所した児童が1名、社会に自立のための生活習慣作りと就労に向けた自己訓練をしております。

大学生で言えば、良い報告もあります。昨春2名が卒業し、1名が県の教員採用試験に合格し、現在児湯郡内の学校で先生として働き始めており、もう1名は、保育士として石井記念友愛社の乳児院で働いてくれています。2人とも社会に貢献できる人材にりっぱに育つたわけですし、石井記念友愛社としましては、胸の張れる結果であります。現在生活している子供たちにとつても目標となり得ますので、アピールしていかねばなりません。

私たちは児童養護施設の園生活を、運命を変えるための修行だと子供たちには話しているのですが、この社会的養護に関しましては、先ほどの良い報告とは裏腹に国の政策は大きく変わりつつあり、かつてない危機感を持ち始めています。

これは石井記念友愛社の直接の活動ではないのですが、一昨年8月の「石井十次セミナー」で、シンポジストの先生方と5名で「宮崎・高鍋宣言」を発表し、「家庭に恵まれない子ども達の生活の場を都営上げないで！」という見出しのもとに、地域の人々や全国の社会的養護関係の方々に対し署名活動を始めました。友愛社の職員を初め後援会石井十次の会の皆様等多くの方々に御支援いただき、現在37,835名の方々の署名が集まっています。

その要望とは、平成29年8月2日に発表された「新しい社会的養育ビジョン」の中に、乳幼児への原則新規措置入所の停止とか、滞在期間を「原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内」とする等の記述があることに対して、削除を求めるものです。

里親推進については大賛成なのですが、だからと言って、施設への入所を停止したり制限したりしていたら、被虐待児童の逃げ場はなくなっていきます。また入所期間を制限してしまえば、大学進学などはあり得なくなってしまう。子供たちの未来を奪い貧困の連鎖を助長します。そのビジョンの根底に流れる施設否定論は、私たち施設現場で働く者としては、とうてい受入れることができないわけです。この活動は石井十次を初め当時の職員や子どもたちが命をかけて築きあげた、福祉文化を守る戦いでもあります。

最後になりましたが、石井記念友愛社後援会の「石井十次の会」会長橋田和実さんが、この

1月の選挙で西都市長に当選されました。この4年間ほど、「石井十次の会」の会長として、子どもたちの自立のために陰に陽に御支援くださいましたことを感謝申し上げます。今後、石井十次の精神を体得された方が西都市行政を司られるわけですので、頼もしく思います。一昨日の十次の会の三役会では、しばらくは市長と会長を兼任いただき、先ほどの署名を厚労省大臣に持っていくときは、御同行いただくようお願い致しました。

「ソーシャルアクション」という福祉の方法論があります。福祉の向上をめざした、地域をまきこんだ福祉活動であります。家庭に恵まれない子供たちの未来を守る活動の輪をもっと大きく広げていかねばなりません。石井十次先生の墓前において、今後も使命感を持って前進していくことをお誓いし、理事長としての挨拶とします。